青年の環

――映画文学人生論

野間宏　（1915-1991）
『青年の環』(1847-1970)
第一部　『華やかな色彩』
第二部　『舞台の顔』
第三部　『表と裏と表』
第四部　『影の領域』　第五部『炎の場所』

古びた羅紗の衣服のようにすりきれた魂を
持つ人々の群れが・・・・・・

野間宏のめったに読まれない小説『青年の環』全五巻六部作を読了し、一息ついた。青年にはこれほどの大作を読みこなす根気がなく、成年は忙しく、老人は青年の感性についていけない。

主人公は大道出泉と矢花正行。高校の先輩と後輩で、二人とも京都の大学にすすんだ。「京都の大学は赤の本場と言われているところで、自分の子供をこの大学へ入れた場合に先ず気をつけなければならないことは、本人はその気でいないつもりでも、いつしか赤にそまるというようにしないとあの学校は非常に危険ですよ」と、矢花正行の母のよし江は知人に注意され、恐れていたが、息子はやはり赤になってしまった。

大道出泉も赤にそまり、学生運動グループの指導者だったが、やがて学生運動から脱落し、大学も退学する。矢花正行とも絶交した。矢花は大道の妹の陽子に未練があるが、別れざるをえない。

時代は一九三三年（昭和八年）から一九三九年（昭和十四年）、場所は京都、大阪、神戸。欧州では独ソ不可侵条約が結ばれ、フランスとイギリスがドイツに宣戦布告して第二次世界大戦が勃発した。矢花正行は大阪市役所で古びた羅紗の衣服のようにすりきれた魂を持つ人々の群れにまじって、被差別部落の融和事業の仕事を担当するかたわら、左翼運動にもかかわっていた。

青年の環 ――― 映画文学人生論

シベリアで日ソ両軍が交戦したノモンハン事件の影響よりも独ソ不可侵条約の成立による人民戦線への影響を彼は心配している。

一方、無頼の生活を送る大道出泉は、性病（梅毒）を患い、腐敗の哲学と称して、大道家の隠ぺいされた秘密をあばこうとする。父の大道敬一は電力業界の実力者、母親の重子は後妻で、陽子を生んだ。出泉の実母は先妻ではないことが判明した。どうやら父親がかこっていた女らしい。

さらに、それまで腰巾着のように出泉に従っていた田口吉喜が態度を変えて、大道家の人々に金銭をたかりだした。出泉が調べてみたら、父が世話をしていた女と田口が結婚していた事実や田口が被差別部落の出身者という事実が判明する。

田口との対決を決意した大道出泉と市役所吏員として被差別部落の解放を支援する矢花正行。二人の青年の環は、それぞれ別の方角からではあるが、被差別部落でふたたびつながる。

かつては青年であったが、現在は老人の読者がいまこの小説を読んでも二人の青年の思想や行動はよく理解できない。なんとか理解できるような気がするのは矢花よし江だけだ。

彼女はプレイガイドで働いて、一家の生計を支え、立ちん坊や不動産業者にだまされても、真宗への信仰を失わない女性として描かれている。

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや

親鸞